

特集 戦後80年

つなぐ 記憶と想いのバトン

戦争を経験した世代の高齢化に伴い、当時を知る機会が少なくなっている現代。戦争の記憶や悲惨さを風化させることなく、次世代に伝えていくことが求められています。戦後80年の節目を迎える今、当時の体験・記憶を語り継いでいくために活動している皆さんの想いをお伝えします。

問 市長公室広報係 (☎35-0924)

1. 記憶の継承 それぞれの形で

我がまちの記憶と資料を後世に残し続ける

菊川市戦争体験を伝える会

今から40年前となる昭和60年8月、現在の「戦争体験を伝える会」の原点となる『崩壊す・ビルマ戦線』出版記念の会が開催されました。この本は、JR菊川駅前で開業した医師・木佐森恒雄氏が、軍医としてビルマ戦線を生き抜いた体験を記した本です。当時、定期的に集まって「読書会」を開いていた市民有志が、出版を機に木佐森氏を招き、戦場での体験を語ってもらいながら読み進める会を企画。当日は、予想を大きく上回る94人が集まり、会は大盛況となりました。これを機に、市内の戦争体験者を招き話を聞く『聞く会』が毎年開かれるようになりました。これまでの語り部は、義勇軍に嫁いだ女性や、シベリア抑留された人、ろうあ者としての戦場を生き抜いた人など、それぞれの立場から証言が語られ、来場者の心を動かししました。やがて、

戦争体験をつなぐ40年の歩み



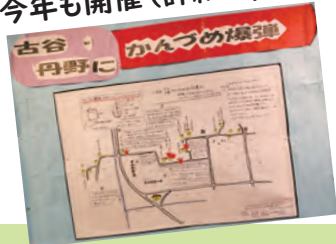
「『聞く』だけでなく『伝える』ことにも力をいれたい」との思いから、会の名前を「菊川市戦争体験を伝える会」に変更。市内に残る戦争の資料や写真の展示も行うようになり、現在も続けられています。

「地域」の記憶にこだわる

会の代表・北原勤^{つとむ}さんは、「入会前、私は教員として歴史を教えていましたが、市内で何があったかには触れていませんでした。戦争体験者の話を初めて聞いた時は非常に衝撃で、語り継がなければいけないと強く感じました。そのため活動の当初から『市内の人』や『地域に残る資料』にこだわって活動しています」と話します。

昨年8月、菊川文庫で開催された展示会では、10日間で300人を超える来場者が訪れました。来場者からは「市内にこんなにも戦争の跡が残っているとは知らなかった。その場所に行ってみたい」、「胸が締め付けられる思いになった」など多くの反響が寄せられました。

今年も開催(詳細はp17)



語り部だけでなく資料の継承も課題に

高齢化に伴い、個人で貴重な資料を保管することの難しさや、家族に捨てられてしまったという声を耳にする機会が増えてきました。語り部だけでなく資料の継承も危機に直面していると感じます。市内の記憶を形として残すために、今後も記録や継承方法を考えていきたいです。

菊川市戦争体験を伝える会 代表 北原 勤^{つとむ}さん

